

書 評

日本放送出版協会 (1988年9月20日発行)

NHK取材班 朝倉 正・濱田隆士

大島泰郎・竹内 均著

新・地球物語 3 宇宙船「地球号」のゆくえ

評者 菅野 強*

Tsuyoshi Sugano

NHK特集「地球大紀行」(1987年1月～同年12月、全12集)の確定台本を素材に、映像媒体を活字媒体に転換・再構成し放送文化と出版文化の整合をめざした新しい試みであると記してあるように、本書はまさにその素晴らしい映像の結集を活字を通して追体験させるものだけでなく、全3巻に網羅された内容は、極めて分かりやすく地球のナチュラルヒストリーを、新しい視点を支えつつ、肌で感じさせる軽快な読物の1つとしている。全体を通して地球がいかにかけがえのない星であるかを説く。とりわけその中の重要なキーワードでもあるエネルギー資源地球環境の成り立ちとその課題についても、専門家を含めて学生・一般人の入門的観点から、地球像のなかでどのように位置するかを、直観的に理解するに抜群の書となっている。その周辺教育効果も極めて大きいと思われる。さて、この第

さて、この第3巻は、第9集「移動する大砂漠」、第10集「資源を産んだマグマ噴出」、第11集「多重バリアーが守る生命の星」、第12集「太陽系第3惑星46億年目の危機」、そして特別読物、地球・もう一つの驚き「風のミニ博物誌」(朝倉正)、「資源と人間」(濱田隆士)、「地球大気、もう一つの物質」(大島泰郎)、「人間が変えてきた地球」(竹内均)および新・地球物語/主要取材地図などから企画編集されており、色々な視点からの読書可能性を秘めている。資源環境探査評価における支援情報知識という極めて細分化した領域を専攻する浅学の小さな書評を試みさせていただいても、大変興味を持てる読物であることをまず述べておきたい。なお、インテグレイテッドな評価からの書評というよりキーワード・摘録の書評に終始したもので、決して十分なものとは言いがたい。本書のねらいとするものの一端に触れることができればと思う。

まず、第9集では、ヨーロッパ気象衛星メテオサッ

ト画像の3時間おきのモンタージュによってパリに降る赤い雪の謎が解き明かされることをはじめ、3カ月の衛星画像の重ね合せから地球上に形成されるドーナツ状乾燥地帯が説明されること、さらに1973年から1984年までの衛星探査画像の変化はアフリカ4大湖の一つチャド湖が地図上から消し去られようとする様子を捉えていること、また1981年11月スペースシャトルコロンビア号がサハラ砂漠に向けた地球探査電波は、厚さ6メートルの砂層を透過しその下の基盤岩から反射して驚くべき画像、すなわチナイル川に劣らない大きな川を浮び上がらせ、サハラ砂漠がかつて豊かな湿润の時代であったことを裏づけるなど、衛星探査画像を効果的なツールの1つとして、生命をはぐくんだ地球独自のシステムが一方では生命を拒み続ける環境を作り出していることに迫る。

第10集では、漠然と用いられている「資源」という用語に説明を加えた上で、地球が豊かな資源を持つ理由、資源を作る大自然の力、地下水が作るもう一つの資源、資源作りの主役“水”を持つ星、海底の資源山脈の発見、地中海文明を支えた資源山脈、プレート運動がもたらす資源濃集効果、そして高度技術文明をも支える地球の営みなど、幅広くきめ細かい素材を用いてかけがえのない地球資源を解説している。さらに、資源と人間について、エネルギー資源の成り立ち、限界のあるエネルギー資源の利用、そして文明の発達に地球物質の犠牲において成り立った以上その影響を自ら始末してやや安全な元来の地球システムの歩調に合わせるべきとする。

第11集では、幼児のように人類はそのありがたさに気がつかなかったところの、生物圏を暖かく包んでくれる母のような存在の地球大気はじめ何層にもわたる多重バリアーの大切さを、気象衛星ノア5日分の雲の合成画像をはじめ宇宙線観測、オゾン層のCG画像、アメリカ地球観測探査衛星ニンバスの南極上空オゾン

* 京都大学工学部資源工学科
〒606 京都市左京区吉田本町

ホール画像や両極オーロラ同時観測など、豊富な資料を用いて説明している。そして20億年前、酸素が一種の環境汚染であったとき生命の進化でその危機を乗り越えた。今日では成層圏オゾンバリアーを破壊する文明社会の廃棄物汚染フロンガス放出問題に対して、生命の進化の時間的余裕のない現在、残された道は人類の英知の結集であると強調する。

第12集では、46億年かけて丹精に作られた地球の微妙なバランスを破壊しようとするものは何か。爆発的な地球人口増加の莫大なエネルギー消費。文明高度化が私達に快適な生活をもたらす反面、地球資源環境を危機におとし入れている。ギリシャローマ文明の滅亡が何を教訓として残したか。地中海からヨーロッパそして新大陸へと緑の森を消費する道を選んだ文明にとって、移動すべき新たな森はこのかけがえのない星の上にはもはや残っていない。その限界を化石燃料エネルギーによって乗り越えた人類は、今日急増するエネルギー消費、それは人工衛星からの夜のアメリカ大陸

の映像の輝かしさや温室効果などの例を挙げるまでもなく、人類はエネルギー使用をどこまで許されるかという課題もかかえ、地球資源環境汚染・破壊という新しい限界にタイムラグをもって気づき始めている。そしてこのような新しい危機を救えるのは、科学と技術の役割、広く人類の英知に他ならないと説く。そして地球上での人間の大規模な活動が永年にわたって保ってきた自然界のバランスを崩すのではないかという心配に対して、地球物理学専門家の地球環境に及ぼす影響の定量的考察を含め、科学技術の可能性と役割という観点からの落ち着いたここのでの一般的結論も掲げた。まさに、地球資源環境を解き明かす膨大な資料の一端である美しい衛星探査画像やCG画像も駆使して新しい「地球物語」の一面を形成した。一年間12集にわたり先行した映像化とは別に、ビジュアル要素とキャラクター要素を僅か200ページに織り込む工夫によって、これだけで十分に、新情報知識の宝庫の扉を開くような1つの易しい入門図書としている。

